

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問6）に答えなさい。

人間は毎日生活している間に、「あれ、ふしぎだな」と思うときがある。それにも小さきまがまがあり、ふしぎだと思いつつすぐ心から消えてしまふのと、あくまでそのふしぎさを追究していきたくなると、相当に程度の差がある。

電車に乗っていると、赤い帽子に赤い靴、靴かばんまで真赤という服装のおじさんが乗ってくる。「あれ、ふしぎな人」と思うが、おじさんがどこかで降りてしまうと、「変な人だったな」と思い、それで忘れてしまう。この際は、「わかった」というところはないが、「変な人」ということで、自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から(7)ハイジョしてしまうことにより、心の平静をとり戻す。

せっかく平静をとり戻したのに、翌日まったく違うところで電車に乗っていると、また例のおじさんがやってきた。こうなるとそのままではおれない。「偶然だ」、「あんな服装流行しているのかな」、「あのおじさん、僕をつけているのかな、まさか」などと心がはたらきはじめる。つまり、人間というのは「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておけない。何とかして、それを「心に収めたい」と思う。

「ふしぎ」の反対は「あたりまえ」である。大人はだいたい「あたりまえ」の世界に生きている。ところが、それを「あたりまえ」と思わない人がいる。

リングが木から落ちるのを見て、「ふしぎだな」と思った人がいる。この人はそれだけではなく、その「ふしぎ」を追究していつて、最後は「万有引力の法則」などという大変なことを見つけ出した。リングが木から落ちることは、それまで誰にとつても「あたりまえ」のことだったのに、ニュートンにとつては、それを「心に収める」のに大変な努力が必要だった。そして、彼の努力は人類全体に対する大きい貢献として認められた。

「人間は必ず死ぬ」。これもあたりまえのことである。しかし、これをあたりまえと思わず、「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けた人がいる。釈迦しやかむに牟尼は、それを心に収めるために、家族を棄て、財産も棄てて考え抜いた。彼の努力の結果、仏教という偉大な宗教が生まれてきた。これも人類に対する偉大な貢献となった。

^Aこのように考えると、「ふしぎ」と人間が感じるのは実に素晴らしいことだと思われる。特に他の人たちが「あたりまえ」と感じていることを「ふしぎ」と受けとめる人は、なかなか偉大である、と言えそうである。

こんな人はどうだろう。この人も「人間が死ぬ」という「ふしぎ」に心をとらわれた。それを解決しようとして、仏教やキリスト教や、あれこれの本を読んだ。しかし、どれにも満足できないので、何かにつけ他人に問いかけるようになったし、この大きい「ふしぎ」に取りつかれているので他の仕事にあまり手がつかなくなった。そして残念ながら、この人は周囲の人たちに(4)ケイエンケイエンされ、ますます孤独になって心の状態までおかしくなっ

てきた。こうなると、この人は「嫌われ者」になってくる。

「他の人はごまかして生きているのに、自分だけが考えるべきことを考えている」などというので、こんな人はますます嫌われる。それは「ふしぎ」を自分の力で心に収めることをしないだけではなく、せつかく平安に生きている人の心を乱すので嫌がられるのである。「ふしぎ」と思ったからには、自分でそれを追究していく責任がある。

子どもの世界は「ふしぎ」に満ちている。小さい子どもは「なぜ」を連発して、大人に叱られたりする。しかし、大人にとってあたりまえのことは、子どもにとってすべて「ふしぎ」と言っているほどである。「雨はなぜ降るの」、「せみはなぜ鳴くの」、あるいは、少し手がこんできて、飛行機は飛んで行くうちにだんだん小さくなっていくけど、なかに乗っている人間はどうなるの、などというのもある。これらの「はてな」に対して、大人に答を聞いたり、自分なりに考えたりして、子どもは、自分の知識を貯え、人生観を築いていく。

子どもの「ふしぎ」に対して、大人は時に簡単に答えられるけれど、一緒になって「ふしぎだな」とやっていると、自分の生活がそれまでより豊かになったり、面白くなったりする。

子どもは「ふしぎ」という事に対して、大人から教えてもらうことによって知識を吸収していくが、時に自分なりに「ふしぎ」な事に対して自分なりの説明を考えつくときもある。子どもが「なぜ」ときいたとき、すぐに答えず、「なぜでしょうね」と問い返すと、面白い答が子どもの側から出てくることもある。

「お母さん、せみはなぜミンミン鳴いてばかりいるの」と子どもがたずねる。

「なぜ、鳴いてるんでしょうね」と母親が応じると、

「お母さん、お母さんと言って、せみが呼んでいるんだね」と子どもが答える。そして、自分の答に満足して再度質問しない。これは、子どもが自分で「説明」を考えたのだろうか。

それは単なる外的な「説明」だけではなく、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなからうか。だからこそ、子どもは自分の答に「納得」したのではなからうか。そのときに、母親が「なぜって、せみはミンミンと鳴くものですよ」とか、「せみは鳴くのが仕事なのよ」とか、答えたとしても「納得」はしなかったであろう。たとい、せみの鳴き声はどうして出てくるかについて「正しい」知識を(め)キョウキユウしても、同じことだったろう。そのときに、その子にとって納得のいく答というものがある。

「そのときに、その人にとって納得がいく」答は、「物語」になるのではなからうか。せみの声を聞いて、「せみがお母さん、お母さんと呼んでいる」というのは、すでに物語になっている。外的な現象と、子どもの心のなかに生じることがひとつになって、物語に(I)ケツショウしている。

人類は言語を用いはじめた最初から物語ることをはじめたのではないだろうか。短い言語でも、それは人間の体験した「ふしぎ」、「おどろき」などを心に収めるために用いられたであろう。

古代ギリシャの時代に、人々は太陽が熱をもった球体であることを知っていた。しかしそれと同時に、彼らは太陽を四頭立ての金の馬車に乗った英雄として、それを語った。これはどうしてだろう。夜の闇を破って出現して来る太陽の姿を見たときの彼らの体験、その存在のなかに生じる感動、それらを表現するのには、太陽を黄金の馬車に乗った英雄として物語ることが、はるかにふさわしかったからである。

かくて、各部族や民族は「いかにしてわれわれはここに存在するのか」という、^B人間にとって根本的な「ふしぎ」に答えるものとしての物語、すなわち神話をもつようになった。それは単に「ふしぎ」を説明するなどというものではなく、存在全体にかかわるものとして、その存在を深め、豊かにする役割をもつものであった。

ところが、そのような「神話」を現象の「説明」として見るとどうなるだろう。確かに英雄が夜毎に怪物と戦い、それに勝利して朝になると立ち現われてくるという話は、ある程度、太陽についての「ふしぎ」を納得させてくれるが、そのすべての現象について説明するのには都合が悪いことも明らかにようになってきた。たとえば、せみの鳴くのを「お母さんと呼んでいる」として、しばらく納得できるにしても、しだいにそれでは都合の悪いことがでてくる。

そこで、現象を「説明」するための話は、なるべく人間の内的世界をかかわらせない方が、正確になることに人間がだんだん気がつきはじめた。そして、その傾向の最たるものとして、「自然科学」が生まれてくる。「ふしぎ」な現象を説明するとき、その現象を人間から切り離れたものとして観察し、そこに話をつくる。

このような「自然科学」の方法は、ニュートンが試みたように、「ふしぎ」の説明として^(オ)フヘン的な話（つまり、物理学の法則）を生み出してくる。これがどれほど強力であるかは、周知のとおり、現代のテクノロジーの発展がそれを示している。これがあまりに素晴らしいので、近代人は「神話」を嫌い、自然科学によって世界を見ることに心をつくしすぎた。これは外的現象の理解に大いに役立つ。しかし、神話をまったく放棄すると、自分の心のなかのことや、自分と世界とのかわりが無視されたことになる。

せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言った坊やは、科学的説明としてはまちがっていたかも知れないが、そのときのその坊やの「世界」とのかかわりを示すものとして、[○]もつとも適当な物語を見出したと言いうことができる。

ところで、すでに述べた赤づくしの服装の人に二度も出会った人が次に三度目に出会う。そして、「わかった。あれはCIAの人物が僕をつけ回しているのだ」と判断したとする。このような解釈は、自分の心の状態を表現するのにはピッタリかも知れないが、^Dの吟味をまったく怠っている。

あるいは、内的事実と外的事実が取り違えられていると言える。このようなときは、妄想と言うことになる。

このことは逆に考えると、精神病的な妄想と言えども、それを「異常」としてのみ見るのではなく、その人が世界と自分とのかかわりを、何とか自分なりに納得しようとしたり、それを他人に伝えようとしたりする努力のあらわれとして見ることもできる。

自然科学と妄想との間に「物語」があると考えると、その特性がわかる。簡単に言うと、自然科学は **E** に、妄想は **F** に極端に縛られた「物語」ということになる。

(河合 隼雄『物語とふしぎ』による。ただし一部本文を改変した。)

問 1 傍線部(ア)と(イ)の漢字に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **1** と **5**。

(ア)

ハイジヨ

1

- ① ハイキヨとなった家。
- ② ハイカンできない寺。
- ③ ハイケイの建物。
- ④ ハイトウされる金額。
- ⑤ ハイシュツした汚水。

(イ)

ケイエン

2

- ① 保険をケイヤクする。
- ② ケイシャを登る。
- ③ 交通ルールをケイハツする。
- ④ 正しいケイゴを使う。
- ⑤ 危険をケイコクする。

(オ)

フヘン
5

- ① 食欲フシンが解消する。
- ② 家のフシンを頼む。
- ③ フユウ層が増える。
- ④ フハイした組織を糾弾する。
- ⑤ 宇宙船の中でフユウする。

(エ)

ケツシヨウ
4

- ① ケツセンを勝ち抜く。
- ② 顔のケツシヨクがよい。
- ③ グループをケツセイする。
- ④ あの本はケツサクだ。
- ⑤ 病気でケツキンが続く。

(ウ)

キヨウキユウ
3

- ① 経費をセイキユウする。
- ② 物資のホキユウをする。
- ③ キユウアクを暴く。
- ④ タイキユウ力を競う。
- ⑤ 栄養をキユウシュウする。

問2 傍線部A「このように」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 6。

- ① 「あたりまえ」の世界の中で、「ふしぎ」を見つけ出し、その「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておかずに「心に収めた」人の努力の結果が、人類に対する偉大な貢献となった。
- ② 「あたりまえ」の世界の中で、「ふしぎ」を見つけ出し、その「ふしぎ」を「ふしぎ」のままで心の中から消し去ることにより、心の平静を取りもどすのが普通の人である。
- ③ 「人間は必ず死ぬ」にもかかわらず、「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けた結果、家族を捨て、財産も捨てて考え抜き、仏教という偉大な宗教が生まれた。
- ④ リンゴが木から落ちることを「あたりまえ」の事であると理解することが出来なかったニュートンが、「ふしぎ」を「心に収める」努力をした結果、万有引力を見つけ出した。
- ⑤ 毎日生活している間に、「あれ、ふしぎだな」と思うときがあるが、その「ふしぎ」は日常生活の中では、すぐ心の中から消えてしまうものである。

問3 傍線部B「人間にとって根本的な『ふしぎ』に答えるものとしての物語、すなわち神話をもつようになった」とあり、「神話」についての説明が続く。筆者の考える「神話」の説明として合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 7。

- ① 「神話」とは、人類が言語を用いはじめた最初から、人間の体験した「ふしぎ」、「おどろき」などを心に収めるために用いられたものである。
- ② 単に「ふしぎ」を説明するだけのものではなく、存在全体にかかわるものとして、人間の存在を深め、豊かにする役割を持つものである。
- ③ 全ての現象について説明するには都合の悪いことも、「神話」を現象の「説明」としてみると、明らかになるものである。
- ④ 「神話」とは、「ふしぎ」な現象を説明するとき、その現象から人間を切り離れたものとして観察し作り上げた話である。
- ⑤ 「神話」とは、それを嫌い、まったく放棄してしまうと、心のなかや世界とのかかわりが無視されたことになるものである。

問4 傍線部C「もつとも適当な物語を見出したと言うことができる」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

なさい。解答番号は 8。

① せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言った坊やにとって、その時には彼にとって納得のいく答えであったが、それはあくまで物語にすぎず、しだいに都合が悪くなる。

② せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言った坊やにとって、それが科学的説明としては間違っている、そう答えたその時には、彼にとっては最適な答えであった。

③ せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言うことは、すべての人にとっては、妄想に過ぎないが、それを言った坊やにとっては明らかな事実であった。

④ せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言うことは、いわゆる「神話」であり、これを否定することは、それを言った坊やと「世界」とのかかわりを無視することになる。

⑤ せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言うことは、科学的説明としては間違っているが、それを否定することは、それを言った坊やの「世界」を否定することになってしまう。

問5 D・E・Fに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

びなさい。解答番号は 9。

① D…外的事実・E…内的事実・F…外的事実

② D…内的事実・E…外的事実・F…内的事実

③ D…内的事実・E…内的事実・F…外的事実

④ D…外的事実・E…内的事実・F…内的事実

⑤ D…外的事実・E…外的事実・F…内的事実

問 6

本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 10 ・ 11。

- ① 人間というのは「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておけず、「心に収めたい」と思うものである。
- ② 「ふしぎ」に心がとらわれて、それを解決するために、何かにつけ他人に問いかけるようになる人も認めなくてはならない。
- ③ すべてを「あたりまえ」と判断して、平安に生きている人の心を乱すことは許されない行為である。
- ④ 自然科学がつくる話は、「ふしぎ」な現象を説明するのに、その現象から人間を切り離したものとして観察することで生まれる。
- ⑤ 現象を「説明」するための話は、なるべく人間の内的世界を係わらせないようにしないと、間違ったものとなる。
- ⑥ 内的事実と外的事実を取り違えて説明すると妄想となるが、それもまた一つの物語として受容することが大切である。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問6）に答えなさい。

私とその古書店へ通うようになって、ずいぶんになる。まだヴェネツィアへ通いで訪れていた頃から、近くを通れば必ず立ち寄っていた。いや、無意識のうちに何かしら理由を作っては、店を訪ねるようにしていたのかもしれない。寄るけれど、買わなかった。ショーウィンドウに並ぶ本を眺め、店内の新しい山々を見上げて溜め息を吐き、店主に挨拶してそのまま帰ることが多かった。

ヴェネツィアを訪れるときは、人と会ったり美術展見学だったり。たいてい日帰りか一、二泊の滞在で、帰りの電車の時刻を気にしながら町を回った。美術展を観たあと図録を買うと、もう他には何も持てない。土産に、と面談相手から貰ったワインや菓子包みを抱えて帰路につくこともしばしばだった。

路面には、古からの石が敷き詰められている。訪問者は皆、徒歩だ。全員が重いスーツケースやキャリーバッグを引けば、町はますます傷むだろう。だから、荷物は背負い持つ。背負える分量は限られている。古書店に立ち寄るものの手ぶらで帰っていたのは、そういう事情もあるからだだった。

店内に漂う、干草のような甘くて古めかしい書籍の匂いを嗅ぐと、幼い頃に祖母に抱いてもらったときのことを突然思い出したりした。記憶が、祖母の和服に染み込んだ樟脳しょうのうの香りに繋がったのだろうか。あるいは過ぎた時間には、国境を越えて、人にも本にも共通した匂いがあるのだろうか。過去へ迷い込んだような店内にいと、ほっとした。

店が面する路地は、観光客の雑踏からは離れている。ときおり聞こえてくる屋外からの物音、たとえば教会の鐘の音や子供がむずかる声、カモメの羽ばたき、雨だれや配達人が引くリヤカーの車輪の音は、順々に本に染み込み店内は変わらずしんとしていた。町のさまざまを丹念たんねんにすくい上げ、では店内に招き入れ、抱えているように思えた。

店が扱っているのは、〈ヴェネツィア〉と〈美術〉をテーマにした古本だけである。（注1）蒐集家向けの（注2）稀覯本ではない。読むのが好きな人たちの手から手を渡ってきた、古い本だ。次に読まれるのを待っている本なのである。

一番奥の本棚には、両手でも持ち切れないほど分厚い大型の美術本が並べてある。イタリアの美術専門出版社は、どこも傑出した印刷技術を誇る。一冊抜き出してみると、（注3）ティツィアーノの画集だ。かなりの年代物なのに、印刷の色は少しも褪せていない。紙はしつとりとして、ページを繰ると指先に吸い付いてくる。艶やかで張りがあり厚いのに、めくり心地はごく軽やか。〈見てください〉と、本が自らページを繰るようだ。これまでの持ち主たちに大切にされてきたのだろう。余白は黄ばむことなく時を重ねていて、絵画がいつそう映えて見える。

平台には、廉価版のガイドブックや郷土料理レシピ集、干潟に言い伝えられる民話などのタイトルが見える。専門雑誌のバックナンバーもひとまとめにして置いてある。山ごとに大まかな仕分けはされているようではあるけれど、

「ここは、丸ごとヴェネツィアの大衆ものなんです」

ときどきキロ単位で量り売りをするのだ、と店主は愛おしそうに本の山に手を載せて言った。

いつも店主は、入り口のすぐ脇に座っている。小さな机はレジと電話とコンピューターを置くともういっぱいだが、それでもわずかな隙間には本が積まれている。おおかたが小ぶりの本だが、この場所がどうも特等席らしい。これぞと思う本が入ってくると、店主はまずここに置く。しばらく様子を見る。幼子を手もとに置き、見守るようである。客がいないときは、店主がレジ前に置いた本を読んでいる。たいていの客は探している本があつて入ってくるが、中にはただ本のそばにいたくてやつてくる人たちもいる。聖地巡礼のようでもある。先祖の墓参りのようでもある。どの人も店のことをよく知っていて、入ってくるとまずレジ前に目をやる。〈おつ〉という顔で何冊かを手に取り、店主と雑談を始めたりする。居合わせた客同士が顔馴染みだと、二言三言、遠慮がちに近況を話したりする。

「サンマルコ広場に近いあの店だけ……」

「とうとう来月には、裏の画廊も代替わりらしいな」

「来週は、水上バスが朝からスト決行だよ」

「ここへ来る途中、映画の撮影隊とすれ違った!」

本の間に、ヴェネツィア訛りが低く重なる。町の静かな息遣いを聴く。新聞にもテレビニュースにも出ない無数の出来事が集まって、日常生活は出来上がつている。名所旧跡からは知ることのない無名のヴェネツィアの顔が、古書店の中に垣間見える。客たちは、本を買うためだけではなく、レジ前で四方山話をするために店を訪れるようにも見えた。ときには、各人各様に本の感想を述べたりもした。客たちの話を介して、本の声を聞くような気がした。店主は客たちのお喋りに口を挟むことはせず、にこにこしながらただ聞いている。

ヴェネツィアに住み始め荷物の心配をせずに店に寄れるようになると、あれもこれもと気が急いた。すぐに読まなくてもいいけれど、今手に入れておかなければもう二度と会えないかもしれない、と思う本ばかりだったからだ。棚から棚を丹念に見て回り、積み上げられた柱を一本ずつ眺め、山を崩しては選り集めた大量の本の前に、溜め息を吐いた。店主は私が粗選びした何冊もの本に目をやりながら、「これなら図書館で済む内容」とか「初版しか出ていないから持っておいたほうがいい」「重さがあり過ぎるから、店に通つてよく見てから決めても遅くない」「この本は、そのうち廉価版も入荷するな」「同じ著者のなら、後続本のほうがいいかも」など、ぶつぶつ言いながらいくつかの袋に分け、

「家へお持ちになり、ゆっくり目を通してから決めてください。気に入らなければ、また戻してくれればいい」
と手渡し、代金を受け取ろうとしないのだった。

ヴェネツィア共和国は栄華の頂点を極めた十五世紀頃から、長らく欧州の出版界でも頂点に立ち牽引^{けん}してきた。ヴェネツィアは、紙の都でもあったのだ。

海運業で栄えた国である。異国から上陸する最新の情報や人材、物資を目がけて、各地から商機を狙う人々と資本が集まった。コンスタンチノープルが陥落した際、ギリシヤ人たちがヴェネツィアへ逃れてくるときに携えてきたのは、何はさておき書物だった。後世への遺産として、古代ギリシヤから伝承される^エ英知をヴェネツィアは預かり受けたのである。古典から最新の知識までを編み、書き留めて本にまとめ、ヴェネツィアは世の中の基盤を築いた。

当時こうした多くの著作は、豪華で貴重な皮革装丁の大型写本でしか読めなかった。それを十六世紀にヴェネツィアの出版人^(注4)アルド・マヌツイオが、^(注5)グーテンベルクの印刷技術をもとに、掌^{てのひら}に載る判型で大量に短時間で出版することに成功する。それまで知識層や富裕層だけに限られていた本が、広く一般人にも読めるものとなった瞬間だった。

〈^D古代ギリシヤが自分の手の中にある！〉

私設図書館や高貴な人々の書斎から本は飛び出した。馬上や旅先、庭や居間へ。さまざまな境界を取り払い、読む楽しさの前に世界がひとつになった瞬間でもあった。時代の最先端産業はヴェネツィアで本に関わること、となったのである。

現在では土産物店で賑わうリアルト橋からサンマルコ広場への通りだが、当時はここに出版社や印刷業者、書店が軒を連ね、欧州一の売上を誇る書籍通りだった。内外から秀逸な出版企画や編集者が集まり、選り^よ抜きの紙や表紙用の皮革、綴じ紐、顔料をそろえ、装丁や刻字、版画の名工たちの手により、本が次々と創られていった。

本は本を呼ぶ。さらなる情報や人を集め、富を増やし、ヴェネツィアは本に支えられたのである。

それから五百年余り経った今、町には新刊書店が数軒残っただけ、と寒々しい。観光客中心の市政、高騰し続ける物価や旧態依然としたインフラに見切りを付けて多くの住人が町を去っていき、^E書店は顧客を失った。

〈^F内田 洋子『十二章のイタリア』による。ただし一部本文を改変した。〉

(注)

- 1 蒐集家……美術品、骨董品^{こどうしやう}、切手などを、趣味や研究として特定の分野の物を集める人。
- 2 稀覯本……古書や限定版など、世間に流布することがまれで、珍重される書物。
- 3 ティツィアーノ (1490頃-1576) ……盛期ルネサンスのヴェネツィア派を代表するイタリア人画家。

- 4 アルド・マヌツィオ (1450 頃-1515) ……ルネサンス期ヴェネツィアで活躍した出版人。商業印刷の父と言われる。
- 5 グーテンベルク (1398 頃-1468) ……ドイツ出身の金細工師、印刷業者。活版印刷技術の発明者として、広く知られている。

問1 傍線部 ア～エ の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 12 15。

ア 雑踏

12

- ① 誰もが必ず行く場所
② 人がこみあっているさま
③ 人が多く騒々しいさま
④ 踏み散らかされた場所
⑤ ゴミが散らかっている場所

イ 丹念に

13

- ① できる限り正確に
② 何一つ落とさず
③ 思い付くままに
④ 心を込めて丁寧に
⑤ しっかりと選択して

エ

英知

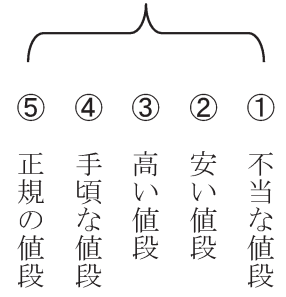
15



ウ

廉価

14



問2

傍線部A「溜め息を吐き」、傍線部C「溜め息を吐いた」とあるが、筆者はなぜ「溜め息」を吐いたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① 読みたい本、手に入れた本があまりに多く、Aの溜め息はそれを運ぶすべを考えると諦めざるをえなかったため、Cの溜め息は厳選しても大量であったために吐いてしまった。
- ② Aの溜め息もCの溜め息も、読みたい本、手に入れた本があまりに多く、それをすべて読み終わるためにはどれだけの時間とお金が必要であらうかと考えると呆然として吐いてしまった。
- ③ Aの溜め息もCの溜め息も、読みたい本、手に入れた本があまりに多く、持って帰る距離は違うが、それでもすべてを運ぶすべを考えると思わず吐いてしまった。
- ④ Aの溜め息は、何かしら理由を作って訪ねた店ではあるが結局気後れして買い物ができなかったため、Cの溜め息は、店主の意にかなうかどうかが不安になったため吐いてしまった。
- ⑤ Aの溜め息もCの溜め息も、状況は異なるが、読みたい本を選んだとしても、自分の選択を認めて、店主が快く売ってくれるとは思えなかったために吐いてしまった。

問3 傍線部B「本の声を聞くような気がした」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 17。

- ① 店を訪れた客たちが思い思いに口にする本の感想を聞くと、読まなくてもそこにある本の内容を知ることができるような気がした。
- ② 店を訪れた客たちが本を買うことなく四方山話ばかりをしているので、店の本が買って読んでほしいと呼びかけているような気がした。
- ③ 店を訪れた客たちが思い思いに口にする四方山話や本の感想は、だれか個人の意見ではなく、本の中から聞こえてくるような気がした。
- ④ 店を訪れた客たちの話をにこにこしながら口を挟まず聞いている店主に代わって、本が相づちを打っているような気がした。
- ⑤ 店を訪れた客たちのヴェネツィア訛りが低く重なる声を聞いていると、異世界にきたようで、本も会話に加わっているような気がした。

問4 傍線部D「古代ギリシャが自分の手の中にある!」とはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18。

- ① コンスタンチノープルからギリシャ人の携えてきた大型写本を小型化して、誰もが手にすることができるようになったことを表している。
- ② かつて古代ギリシャが栄華の頂点を極めたのと同レベルで、十五世紀頃のヴェネツィアが栄華の頂点を極めたことを表している。
- ③ 印刷技術の発達により、古典から最新の知識までをすべて、掌に載る判型で大量に短時間で出版することに成功したことを表している。
- ④ 小型本で出版できるようになって、古代ギリシャから伝承された知識などを、誰もが手にすることができるようになったことを表している。
- ⑤ 私設図書館や高貴な人々の書斎から飛び出した古代ギリシャの知識を、誰もが手にすることができるようになったことを表している。

問5 傍線部E「書店は顧客を失った」とあるが、その意味することは何か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 19。

- ① 現在の、観光客中心の政策、物価の高騰、旧態依然としたインフラなどに対する筆者の抗議の気持ちを表している。
- ② かつて、情報や人を集め、富を増やすという結果をもたらしていた出版業の衰退、ひいてはヴェネツィアそのものの衰退を象徴している。
- ③ 町に残っているのは新刊書店数軒だけで、ヴェネツィア在住の人々は、町の外にある書店に行かざるをえないという現状を表している。
- ④ 本が本を呼び、本によって栄えたヴェネツィアの町が、五百年たつて方向転換したことを不満とともに表現している。
- ⑤ 掌に載る判型で大量に印刷をすることに成功したようなかつての企業努力を、現在は放棄してしまった結果を象徴している。

問6 傍線部F「内田洋子」は東京外国語大学出身である。その前身の東京外国語学校を卒業した詩人に、中原中也がいる。「汚れつちまつた悲しみ
に…」で始まる詩が収録されている彼の詩集は何か。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20。

- ① 月に吠^ほえる
- ② 叙情小曲集^{じょ}
- ③ 艸^{くさ}千里
- ④ 山羊の歌
- ⑤ 春と修羅

第3問 次の各問い（問1～問3）に答えなさい。

問1 次のア～オの語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 21 ～ 25。

ア 二足の草鞋わらじをはく

21

- ┌───┐
- ⑤ 両立しそうにない二つの職業を兼任するさま

① すでに持っているのと全く同じものをもう一つ手に入れること
- ④ しっかりと足ごしらえをして長距離を歩くこと

② 迅速な動きができるように用意万端なさま
- ③ まったく異なる二つの仕事を一人で同時に行うさま

⑤ 迅速な動きができるように用意万端なさま

イ 二階から目薬

22

- ┌───┐
- ⑤ だれも思いつかないような方法を提案すること

① 遠隔操作によって作業をすること
- ④ 非常に効果的な方法で作業を行うこと

② 自分とは無関係なことに口出しすること
- ③ やり方が回りくどくて効き目がないこと

⑤ 非常に効果的な方法で作業を行うこと

ウ 二の句が継げない

23

- ┌───┐
- ⑤ 何を話してよいか思い付かず、呆然としている状態

① 思わず失念して、次にいうべき言葉が出てこない状態
- ④ 驚いたりあきれたりして、次にいう言葉が出ない状態

② 相手の話し方がとても早くて、相づちが打てない状態
- ③ 感心したり感動したりして、次にいう言葉が出ない状態

⑤ 何を話してよいか思い付かず、呆然としている状態

エ

三つ子の魂百まで

24

- 
- ① 幼年時代の親友とは一生の友であり続けるということ
 - ② 多胎児は不思議な力で意思疎通ができるということ
 - ③ 幼年時代の性質は一生変わらないということ
 - ④ 高齢になっても純真無垢な気持ちを持ち続けるということ
 - ⑤ 好きなものは一生変わらないということ

オ

一筋縄ではいかない

25

- 
- ① 普通の方法では思うようにならないさま
 - ② 一直線に進むことができないさま
 - ③ 一本のロープでは安全が確保できないさま
 - ④ 簡単な方法をとると思うようにいくさま
 - ⑤ すべての人が納得する方法がないさま

問2 次のア・イの語句の使い方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 26 ・ 27 。

ア 離合集散

26

- ① 久しぶりの同窓会で、全国から同窓生が離合集散した。
② 離合集散をした結果、状況を好転することができた。
③ たび重なる離合集散を経て、この組織はできあがった。
④ 誰がどう考えても、今回の離合集散は失敗だ。
⑤ 毎日離合集散をしていると、新しい案が生まれてくる。

イ 試金石

27

- ① あの人にとっての試金石はもう終わった。
② この仕事は彼の成長をはかる試金石だ。
③ 試金石だけが彼の仕事のモチベーションだ。
④ 単なる試金石ではなくもっと貴重な体験だ。
⑤ 仕事の成果として試金石を提出しても意味がない。

問3 次のア～ウの語句の対義語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 28 30。

ア 一般

28

イ 通性

29

ウ 汎用

30

- ① 特有
- ② 特例
- ③ 特殊
- ④ 特許
- ⑤ 特化
- ⑥ 特性